

平成 22 年度 第 2 回英語学教育 FD/ICT 活用研究委員会 議事概要

- I. 日時 : 平成 22 年 9 月 14 日 (火) 午後 1 時 30 分から午後 3 時 30 分まで
II. 場所 : 私立大学情報教育協会 事務局 会議室
III. 出席者 : 山本涼一委員長、五十嵐委員、北出委員、小林委員、西納委員、山本英一委員
(事務局) 井端事務局長、森下主幹、渡邊職員

IV. 資料

- ① 英語学教育における学士力の考察
- ② 学士力実現を目指す ICT 活用授業の開発モデルの例示
- ③ 学士力実現のための教育モデル案

V. 議事概要

1. 学士力実現に必要な ICT 活用の具体的な検討について (前回議題内容の具体的な検討)

□事務局 (前置き)

5 年先でも実効のあるような授業デザインを 2~3 例、1 例あたり A4 版 2 枚程度で作成してほしい。提案した授業デザインが大学側のリソースによって制約されないように、大学側の支援体制も明記してほしい。ICT を授業の補完として使いながら授業の実をあげる方法を探してほしい。ICT の割合が補助的になり、小さくなくてもかまわない。他の委員会の議論では、暗記型からディスカッション型の学びへの移行を検討している。文系ではコミュニケーションを構築するために ICT を使おうという議論がなされている。理系では大学間の連携で教材を使うなどの方向性が議論されている。

□委員長 (問題提起)

本委員会で作成した「到達目標」の 1 と 2 に集中して議論したい。まず 1. 「英語の基本語彙や基本文法をもとに、より高い技術と運用能力を身に付けている」について

□議論 (大きな方向性について)

- ・学生の学力がどこにあるのかははっきりしない。読みを重視した方が良いのではないか。
- ・長いまとまりのある文章を読んでいない。オーラルの指導に力点を置いた教育が浸透している。
- ・学生のレベルによっては、ICT がかえって学習の妨げになる場合もあろう。社会人として職を得たときに機能するような様々なスキルを英語教育の中に実現することが大切では？
- ・発音・語彙力ができていない。発想から理解できていない部分もある。
- ・韓国の国家戦略としての語学教育に見習うものがある。日本の英語教育は「ガラパゴス化」している。日本企業のグローバル化をふまえて、従来とは異なる、発表、交渉、表現力などを視野に入れて考えても良いのではないか。

□委員長 (大きな方向性のまとめ)

中高である程度の基礎力はできている。それを開花させる方策を探りたい。できない子も含めての指導を考えたい。単語や知識の量が足りないが、単語を与えるだけでは語彙は増えない。多読多聴のような大量のインプットが、表現の理解や文法の理解を促進し効果があると思われる。語学力の伸長には時間がかかるので、授業外の課題を与えるような方策を考えたい。ネットのリソースを使うこと、グループワーク、ピアワークも必要である。また、学生を積極的に参加させるために、ICT を介在させる。

□議論 (話題は以下の 3 点に収束した)

1. 多読多聴

- ・リスニングには 98% のメンタルレキシコンが必要であるとの研究もある。英語に接する時間を増やし、語

彙を増やす方策を探る必要がある。

- ・授業外でより多くの英語に接することのできるのは、多読多聴である。
- ・到達度の設定が難しくはないか。
- ・VOAの1500語をもとにNative Speakerの70%を理解するという考え方もある。
- ・インプットばかりでなく、何らかの形のアウトプット、また、自覚の促進もなければならない。
- ・京都産業大学のMoodleReaderモジュールを使うような、比較的手間の省ける方法もある。
- ・必要なものは大量の書籍を読むこと。語彙を与えることも重要。
- ・単語を引きながら読むのでは能率が上がらない。無理をしながらでも読むことを教えるべきである。
- ・語彙を引くことにこだわらないのが多読の方法である。

2. 「場面」の設定について

- ・表現と「場面」とが一致しないことがある。
- ・生活の「場面」に出たときにスキーマがないので理解ができない。会話の場面での体験の積み重ねがない。
- ・そのような「場面」を作り出す学習環境が必要である。
- ・日本人には圧倒的に「場面」の体験が欠如している。
- ・韓国は「英語村」で成功している
- ・「場面」について、オンキャンパスで英語を話す環境ができないか。留学生は活用できないか。

3. Learningについて

- ・学習者を中心に据えるのであれば、TAやSAを介在させるとうまく行くのではないか。
- ・SAだとよく行く可能性がある。学年を混ぜた授業の可能性もある。個人的には学年横断の合同ゼミを行っている、相互に刺激しあっている。
- ・Tutoringは必ずしも人が必要であるとは限らない。ICTが活躍できる場合もあるのでは。

□委員長（まとめ）

これまでの議論をふまえて、1. 多読多聴、2. 場面を設ける、3. Learningを設定する、の3つの方向性を探りたい。

□委員長（問題提起）

次に、「2. 英語で情報を理解して考えをまとめ、対話を通じて情報・意見などの交換ができる」について。

□議論

- ・これは英語によるプレゼンを利用するのが良いであろう、調査、発表、説得など、話す、書く技能の統合的な発信能力を養う場である。
- ・レベルはどうするか、学士力は最高レベルを意識しているのか、英字新聞もStudent Timesなどからはじめて通常の英字新聞を読むことを目指すのか。
- ・自己紹介などから入るのが良いだろう。インカレのプレゼンコンテスト、ディベートなどにつながるようにする。委員の中にはWorld Youth Meetingに関わっておられる方もいる。
- ・得意分野を生かせるようにグループワークとするのが良いのでは。
- ・ビジネスの現場からの声として、考え方が論理的にしっかりしたものを持つのが日本人に大切であるという指摘があった。そうでないとビジネスの現場で相手にされない。論理の通った主張をする、意見を持つことが大切。そのような異文化間コミュニケーションのあり方を示すのも英語の大切な使命。
- ・学生のプレゼンはインターネットの切り貼りのこともある。易しい自分の言葉で相手にわかるように説得力のある話をするのが大切。
- ・学生に評価させることは効果がある。しかし、最初に教員が介入してガイドラインを示すことも大切。

- ・最初から指導を入れるのではなく、借り物で作った自分自身の姿を見せるのも教育効果がある。また、過去の良いものを手本として提示する方法もある。
- ・ICTを使い、手本を示す方法もあるが、その際には個人情報の保護が問題になるため、公開用のサンプルを特別に作らねばならないだろう。

□委員長（まとめ）

授業デザインのモデルをA4で二枚程度に作成していただきたい。以下の内容について担当分けを行い、それぞれ素案を作成し、それをネット上で議論しあって、次回委員会において最終案に練り上げたい。

- 到達目標 1. 多読多聴を重視する
- 到達目標 2. 「場面」を設ける
- 到達目標 3. Learning を設定する)

□事務局（コメント）

授業デザインは学生が半強制的に学習するように工夫する必要がある。評価手段も入れないと難しいのではないか。個別に能力を判定する方法も盛り込んでほしい。あくまでも英語力を測定するのであって、情報リテラシーと混同してはならない。大学卒業試験の方向を文科省が考えている。個々の大学での質保証の問題と絡めて考える必要がある。出口管理（大学卒業時の英語力レベルの設定）が必要である。

□委員（コメントへの意見）

- ・英語 80%、表現力 20%なども考えられるのではないか。
- ・スピーキングについては、TOEIC や TOEFL も参考になるのではないか。

VI. 次回の開催日程

日時 : 平成22年11月13日(土) 13:30~15:30
場所 : 私情協事務室